

祝・完結 誰も教えてくれない短ハリス【第2章】

2021年2月17日・ヘラ釣り

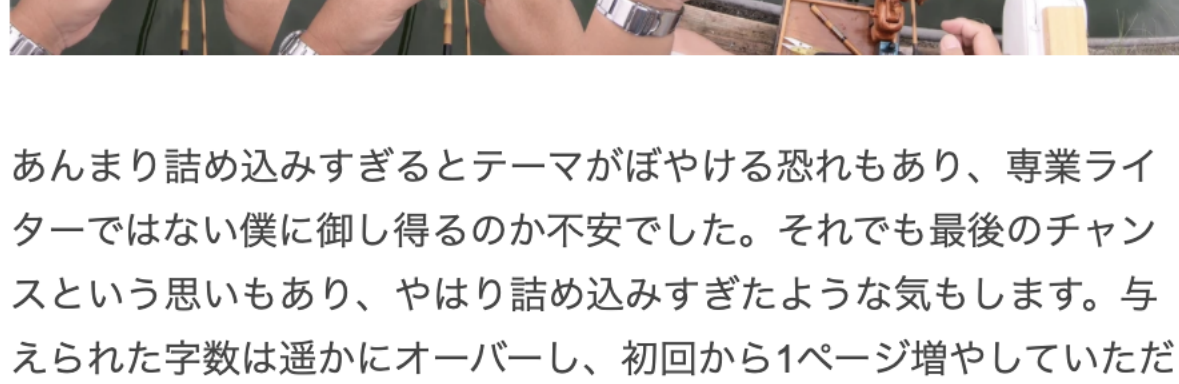
無謀な挑戦

何回分まで書いたかってのは書きちゃまずいような気がするので控えますが、へら専科1・2月合併号より連載している「誰も教えてくれない短ハリス【第2章】」の最終回を脱稿しました。現在発売されているのが3月号であり、連載が始まってまだ2回目であるにもかかわらずです。プロフィールの近況部分やリード等は、未来人になったつमりの「初日に完成させちゃう夏休みの絵日記」状態ですので下書きの域を出ませんが。

なぜそこまで急いだのかと言えば、僕の本気度を編集部に伝えたい思いがまずありました。読者からの評判が悪ければ、途中で打ち切りを受け入れるしかありませんが、完結していれば打ち切りにくいだろう、という算段です。謙遜しても始まらないので本音を言いますが、脳内の断片を繋ぎ合わせてひとつに纏めることさえできれば、過去にない記事になる自信はありました。

内容が正しいとか正しくないとかって話ではなく、①ハリス起点の技術論というのが新しい切り口であること、②トロク掛けセット以外の超短ハリスについて言及する記事が過去にほとんどないこと、③宙から底まで縦断・共エサからセットまで横断する欲張りな記事が少ないことから、やりがいのある挑戦になることは解っていました。

且つ、④自分がライフワークとして研究に身を捧げてきた超短ハリスへの誤解を解き、「対する長ハリスを貶めることなし」に超短ハリスの地位向上を目指すというテーマもありました。そういう思いは記事の中でも散りばめています。



あんまり詰め込みすぎるとテーマがぼやける恐れもあり、専業ライターではない僕に御し得るのか不安でした。それでも最後のチャンスという思いもあり、やはり詰め込みすぎたような気もします。与えられた字数は遥かにオーバーし、初回から1ページ増やしていただきました。初回だけの特例の筈が、結局第2回も増ページとなり、次号以降もそのつもりで構成しています。

変えられないスタイル

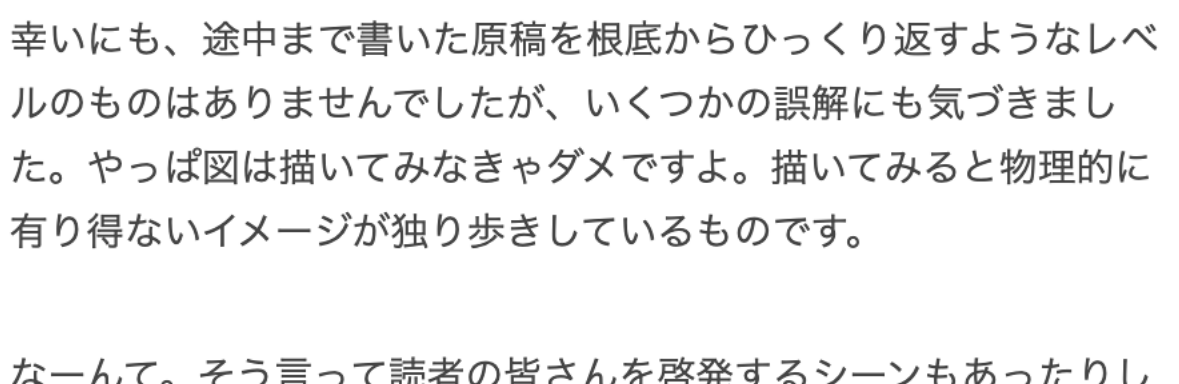
項目を箇条書きにした技術論ではなく、「話し言葉」を用いた流れるような解説にしよう決めました。小説とかエッセイというとかっこつけ過ぎですが、ぶつ切りにならない解説を心がけました。なので例えば、あるひとつの小見出しを跨いでも話が続けているというような、「これも前項と繋がっているんだよ」感はかなり意識して演出しました。それが読みやすさに寄与したかどうかは不明ですが。

今回の連載は、「自費出版でも」いつか世に問うつもりではいきました。が、まさかへら専科編集部から声が掛かるとは思っていなかったもので、準備不足でした。脳内キーワードを慌てて書き出しましたが、当初は足りないパーツも結構あったのが正直なところです。

「先生と生徒の会話」というスタイルこそ踏襲しませんでした。結局手本は過去に執筆した技術論である「ファースト底釣りゼミ（北城先生版）」に求めました。第6回の「復習ノート」のような語り口です。ただあれから20年近く経ってますんで、オナニー臭は極力排除しようと努めました。熱量は当時と変わらない自負はありますが、やはりそこは加齢臭が漂うべきだろうと。興奮は抑え、ドヤるのはほどほどにしないといけません。

まあ当時は「自分の考察ではない」という気楽さもありましたし、「北城さんってすごいだろう！」を抑えることは難しかったですね。結果それが、「俺ってすごいだろ！」に映ったとは思いますが。今回は全責任が自分にあるので、当時以上に緊張しました。

実際に執筆を始めると、言葉になっていない領域も結構あることに気づきました。焦りましたね。短ハリス30年の経験値の中で、「おそらく正しい」というイメージ、「再現性ありまくり」というデータがあり、それを利用して別の事柄を証明しようとするんですが、利用するイメージとデータの証明がなされていない、というわけです。何度も何度も図を描き直し、見比べ、時には工学部に通う長男に助けを求めながら、言葉にしました。



机上論

幸いにも、途中まで書いた原稿を根底からひっくり返すようなレベルのものはありませんでしたが、いくつかの誤解にも気づきました。やっぱ図は描いてみなきゃダメですよ。描いてみると物理的に有り得ないイメージが独り歩きしているものです。

なーんて。そう言って読者の皆さんを啓蒙するシーンもあったりします。上記はそのシーンを書き終えていての展開だったので、自分で吹き出してしまいました。

こういう作業を経て紡がれた言葉を、机上の空論と呼ぶ人もいるのかもしれませんが、実体験（観察結果）を説明する言葉を見つける作業は違うと思っています。ただ、ある事象を「言葉にできた」副産物としての「...ってことは、こういう場合はこうだよ?...そういういえばそうだった！」は、完全に机上論でしょう。でも、実体験がなければ「空」論ですが、あればセーフかなと。

今回の記事に、そういう意味での「空論」は皆無ですが、事象やへら語の翻訳（解釈）を間違えている可能性は否定しません。間違いに対する指摘は真摯に受け止めますし、正しい答えを教えていただきたい気持ちでいっぱいです。とはいえ、そもそも記事の中に江成オリジナルなんてほとんどありません。従来からバラバラに言われていたことを、整理して繋げた記事だと認識していただくほうが正しいと思います。

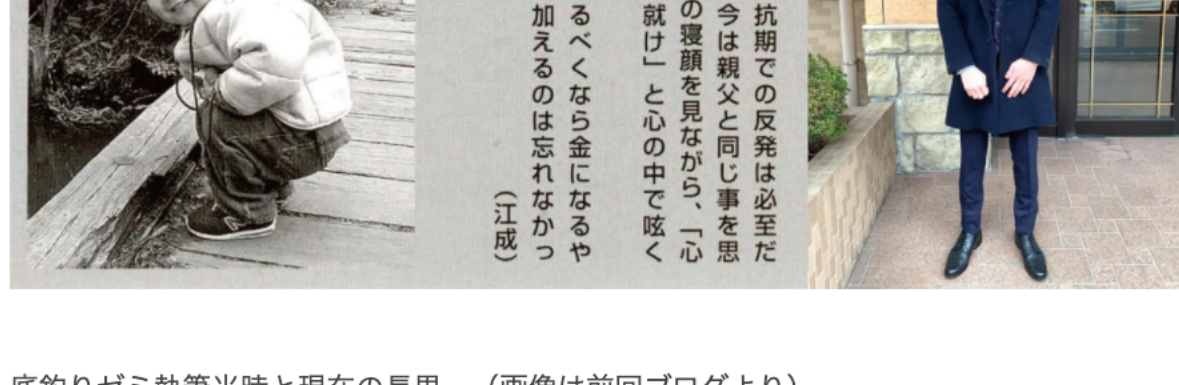
AとBの繋がりが理解できなかった方にとっては接着剤を提供し、どこから考え始めれば良いかわからなかった方にはドアを提供する、そんな記事になっているつもりです。たしかに字は多いです。うまくもない文章です。それでも是非読み込んでいただき、次代の叩き台にいただければ幸いです。読まなかったら間違いなく後悔しますよ（笑）。

今回の記事は、完結できるのかどうか本当に不安なスタートでした。だからこそ急いだんです。キーワードの書き出しは日に日に増えていき、收拾がつけられない事態にも追い込まれました。途中で綿密な設計図が必要だと判断し、マインドマップを描き起こしました。視覚的に一目瞭然になったと喜んだのも束の間、広がりすぎて21インチモニターでは俯瞰できないんです。それでも、項目ごとに進捗ステータスを管理できるので何とかなった感じです。削除するわけにはいきませんでした。チェックマークの付いた項目は極力見返さないようにしました。

本文とのズレを防ぎ、責任の所在を曖昧にしないためにも、イントロの初回を除いて図やイラストは全て僕の手によるものです。Adobeで段組みのシミュレーションもした上で入稿しています。短ハリス、技術論のあり方、自分の思いは全て遂げることができました。総文字数は、字が小さすぎるとクレームの多かった「ファースト底釣りゼミ」全回に匹敵する6万字です。もう、やり切った感満載です。死んでもいいくらいです。死にませんけど。次はいよいよポータブル自動検量機です。なんとかして早く世に出したいと思っています。

※途中で打ち切りになっても原稿はできてますんで、このサイトで公開しますからご安心を（笑）

※トップトナーメンターであり短バリサーでもある今野正明さんのご厚意で、「誰も教えてくれない短ハリス【第2章】の筆者に質問しよう（仮）」ルームを立ち上げていただけることになりました。Clubhouseアカウントをお持ちの方は、どなたでも参加できるんじゃないでしょうか？皆で議論しましょう♪



底釣りゼミ執筆当時と現在の長男。（画像は前回ブログより）